

ひょうご 水百景

No.190 前ノ池・平木橋（加古川市野口町水足）

～疏水の水が十分には届かず機能が発揮できなかった水路橋～

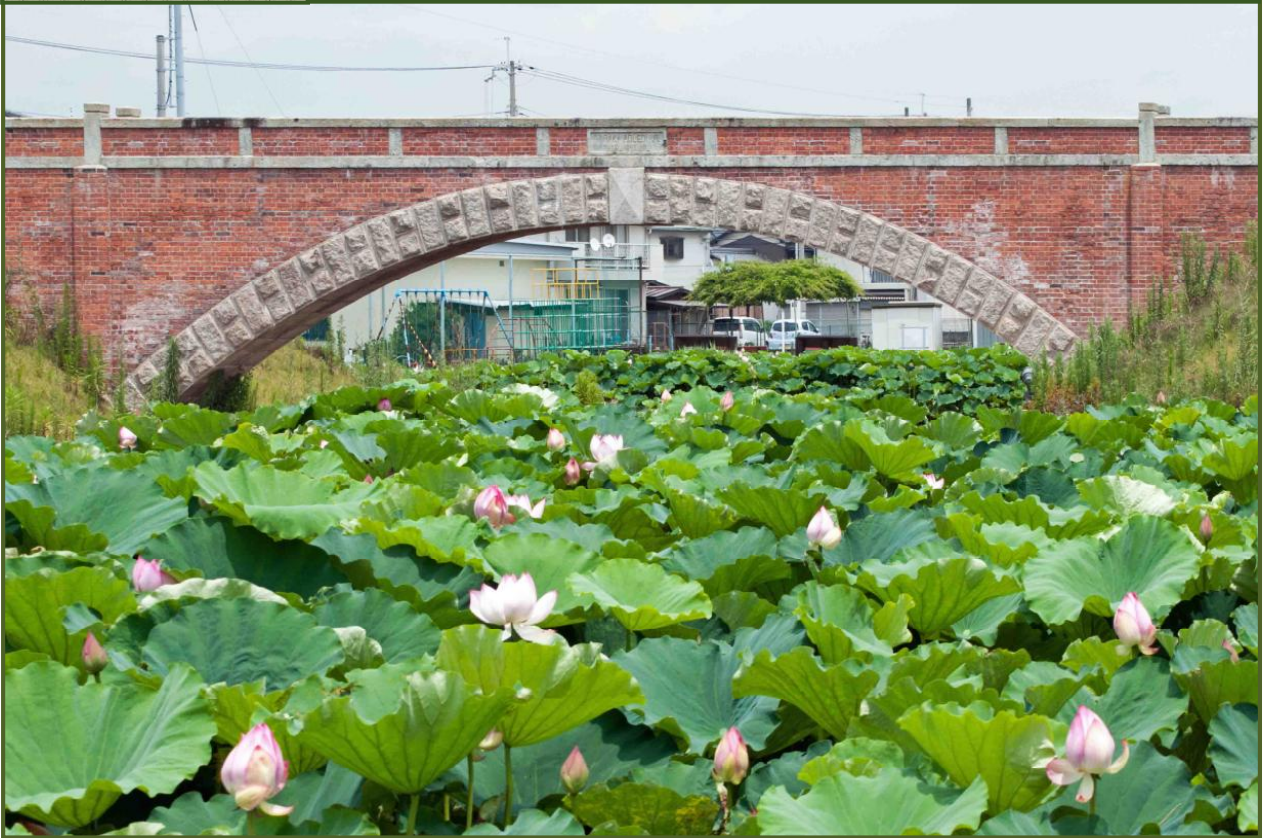


写真-1 前ノ池に咲く蓮の花と充腹石造アーチの平木橋（平成25年7月）

■ 蓮の花越しに見る「石と煉瓦の組み合わせが美しい石造アーチの水路橋」～平木橋

写真-1 は、加古川市野口町水足（みずあし）にある前ノ池で、池面を覆い尽くすように咲く蓮の花越しに充腹石造アーチの水路橋・平木橋を撮影したものです。

この橋は、江戸時代に建設された高掘り溝^{*1}を跨ぐ水路橋として大正4（1915）年9月に架けられたもので、橋長27.1m、径間長16.2m、拱矢（きょうし：橋台の上から要石の下側までの距離）3m、幅1.2m、橋の上部に設けられた水路の断面は幅60cm、深さ55cmです。

延々と流れてきた山田川疏水の水は、この水路橋を流れて平木池に貯留される……はずでした。ところが、平木池が山田川疏水・森安支線の最末端に位置することから、東方の池が先に取水するため平木池には用水が十分に届かず池が満水になる年は極めて稀な状況でした。

そのため、数年後にはせっかく開いた水田も稲作不能で平木池も使用されなくなり、平木橋も無用の長物として雑木林の中に放置されたままになっていました（写真-2）。



写真-2 雑木林の中に放置された平木橋
（『はりまレンガのある風景』HPから引用）

時は流れて、平木橋が立地する場所は平成10（1998）年度に事業着手している東播磨南北道路の建設予定地に含まれることに。平成14（2002）年1月に土木学会から、平木橋が「日本の近代土木遺産（改訂版）現存する重要な土木構造物2800選」にBランク（県指定文化財級）として選定されたことから平木橋の価値が見直され、保存運動が地元や研究者から起こります。

このような状況を踏まえて、事業者である県も保存することを決め、種々検討した結果、平成 21（2009）年に元の場所から約 1.1km 西に位置する水足地区の溜池・前ノ池に移築保存されました。

※1 高掘り溝：村の生産高に応じて人手を出して掘られた溝。ここでは水足村（現・加古川市野町）の戸ヶ池へ水を送る深溝のことをいい、寛文 4（1664）年に完成している。『水足史誌』によると、近世の検田では、石守村（現・神野町）が 600 石、水足村が 644 石であるから、双方この割合で人夫や費用の負担を行ったものと思われる。



写真-3 平木橋および平木池・前ノ池の位置図

■ 水不足を嘆いて名付けた地区名「水足」の水事情

平木橋のある水足地区は、『水足史誌』によると「その昔、水不足を嘆いて水の足ることを悲願として名付けた」と言われています。印南野台地の西端に位置し、耕地は上代（うわだい）、下代（しただい）、新田（しんた）の 3 つに大別されます。

上代は、早くから耕作されていた水田を主とした約 20ha の地域、下代は、太古加古川の河原だった土地を耕地化した約 12ha の地域、新田は海拔約 20m 以上の台地で、元々は山林や畑・原野でしたが、大正時代に山田川疏水からの水を受けて開田された約 17ha（原文のまま）の地域です。

■ 淡河川疏水完成後、水源拡大のため廃案となっていた山田川疏水事業を再興する

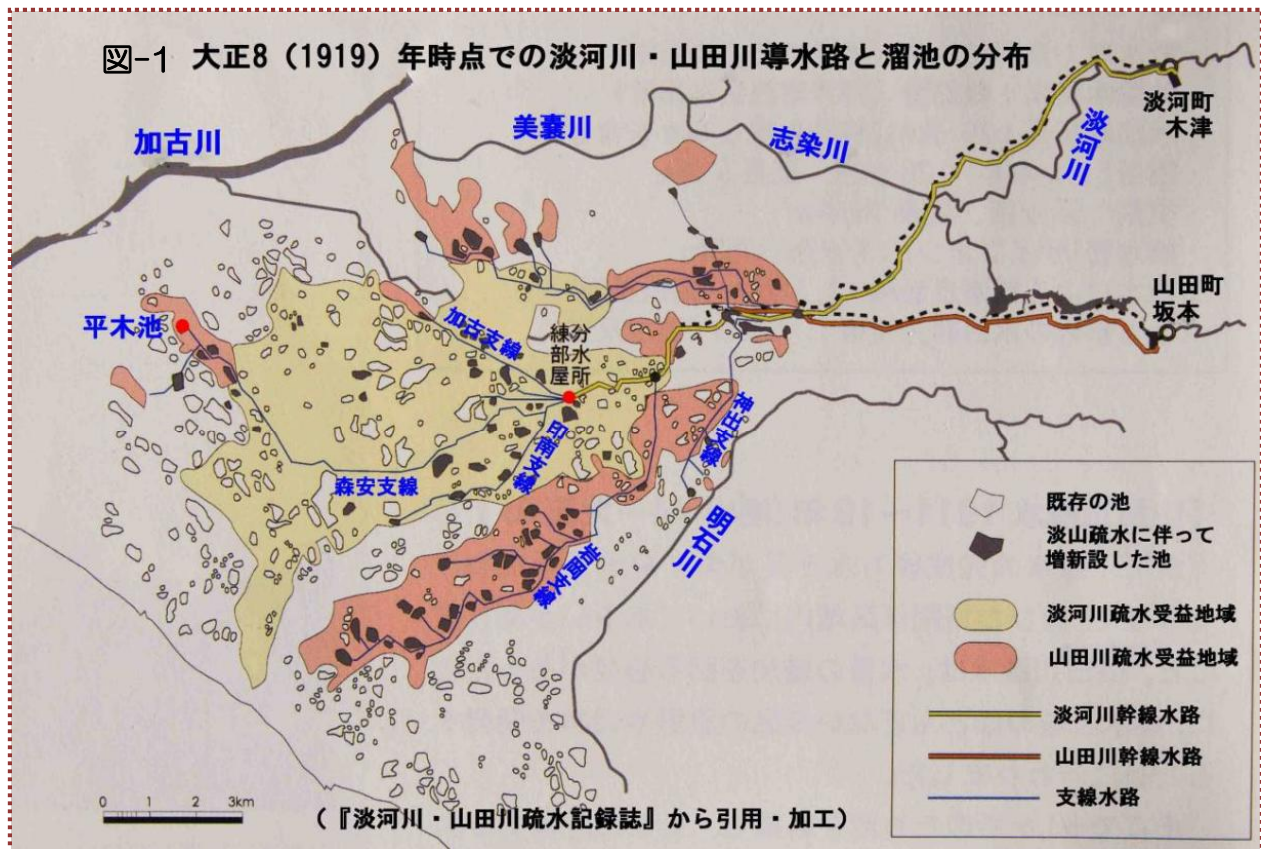
明治 24（1891）年に淡河川疏水が完成、これまで水不足に悩まされてきた印南野台地も新田が急増し、次第に農業経営が安定してくると、周辺の農村では疏水の水源を拡大するため、明治 20（1887）年に廃案となった山田川疏水の再興が検討され始めます。

明治 29（1896）年に山田川疏水の水路測量を実施、明治 38（1905）年には淡河川疏水に係る全ての債務が完済できたことから、江戸時代からの宿願であった山田川疏水事業を起こすことになりますが、工事費の分担や用水路等の用地買収が難航し、なかなか起工には至りませんでした。加えて事業費は淡河川疏水のように官費補助を受けることができず、これが大きなネックとなりましたが、すべて日本勧業銀行からの借入債（28 万円）で賄うことが可能となり、明治 41（1908）年、水利土功会を兵庫県淡河川山田川普通水利組合に組織変更・改称を経て、ようやく明治 44（1911）年 2 月に起工式が行われました。

幹線水路延長約 10.8km、そのうちの半分近くがトンネル（延長 5,150m）で、地質条件も悪かったことから、途中で請負業者を交替するなどして大正 4（1915）年 4 月、山田川疏水の幹線水路が竣工しました。

他方、新受益地に分水する支線や非灌漑期に貯水する溜池の工事も行われました。新たに岩岡、神出、広野、別所、森安の 5 支線（延長約 50km）と 62 基の溜池を築造することになりますが、これらの総工費は 85 万円余に達し、その大部分に当たる 80 万 700 円は日本勧業銀行からの起債によるものでした。

大正 8（1919）年、すべての支線と溜池の工事を終え、山田川疏水が竣工しました。



■ 疏水の水を貯留するために平木池を築造する

明治 40（1907）年、用水の安定確保を渴望していた水足地区も山田川疏水事業に加入し、疏水を貯留するために平木池を築造することになります。大正 4（1915）年 2 月に起工し、同年 6 月に竣工しています。

詳細は、下記の『平木池記念碑』（写真-4）碑文のとおりです（原文は縦書きのカタカナ混じり文です）。

記念碑は、元は平木池西端の道路沿いにありましたが、東播磨南北道路建設に伴い現在地に移築されています。



写真-4 平木池記念碑（背後は東播磨南北道路）

※2 出働団：疏水工事の労働者で結成された組合。日本勧業銀行は起債の条件として、労働者の賃金の 1/10 を自行に貯蓄する契約をしていた。

明治三十九年山田川疏水事業計画せられ、四十年十二月本村これに加盟し、疏水組合において水足字平木に溜池を築造するに決するや水足村において工事出働団※2を組織し、組合より工事の請負を契約し、団長に小山十郎、副団長に米谷喜三郎、橋佐太郎、橋辰五郎を選任し、配下に分団長を置き工事の分担監督をなさしめ、更に仕事を請け負わしめ大正四年二月起工す。副団長米谷喜三郎、橋佐太郎両氏は工事及び会計等全責任を負い、日夜精励刻苦分団長を激励し工夫（こうふ）を指揮し人夫の監督等寝食を忘れて工事に尽瘁し同年六月面積一万六千七百四十坪の溜池を工費一万一千五百円を以て竣工す。溜池竣工し、共に水足耕地整理組合を設立し、畑山林を開墾変換し耕地整理を行い、米谷十三郎組合長となり委員七名これに当たり、大正五年五月起工し八年六月整理面積二十町歩余を竣工す。依って記念のためこれ建つ。

大正八年九月

■ 平木池に水を送るため、高掘り溝に水路橋・平木橋を架ける

平木池の東を北東から南西方向に流れる高掘り溝は、寛文 4（1664）年に完成した青之井用水（曇川から取水し皿池に入り、更に先に流れて近隣の田畑を潤した）から分岐した水路で、戸ヶ池に流れ込んでいます。皿池のある場所の標高は約 22m で、平木池の東の辺りは標高約 27m、戸ヶ池の辺りは約 22m です。平木池の東の高い土地を突っ切って戸ヶ池に水を流すために深い溝を掘ったわけです。

山田川疏水の水は、練部屋分水所で 5 系統の支線（加古支線、天満支線、蛸草支線、森安支線、印南支線：現在は 4 系統に統合）に分水されます。そのうちの一つ、森安支線の最末端部に平木池があります。

凱旋池（埋立地に 1976 年東播磨高校が移転）、萬歳池、鳥ヶ岡池（埋め立てられて今は鳥ヶ岡団地）、横蔵寺（おうそうじ）池（埋め立てられて今は横蔵寺団地）を流れてきた疏水の水を森安支線の最末端部に位置する平木池に注水するためには、この高掘り溝という深い溝を越える必要があり、そのために高掘り溝に架けられたのが平木橋です。地元が費用と人力を提供して大正 4（1915）年 9 月に竣工しています。



図-2 平木橋周辺の地図

■ 森安支線の最末端だったため水が十分には届かず、平木池が満水になることは極めて稀だった

淡河川頭首工・山田川頭首工で取水された水は、図-3 のように練部屋（ねりべや）分水所（写真-5：神戸市西区神出町）に集められ、ここで 5 系統に分水され、各支線周辺に広がる印南野台地を潤しました。山田川疏水竣工後、水足地区は森安支線経由で疏水の水を受ける前提で約 20 町歩が開墾されています。

平木池は森安支線の最末端に位置していて、練部屋分水所で分水された疏水の水は、図-3 の水利系統の流れのとおり平木池に到達するはずでした。

ところが、上流の池が優先的に取水するため平木池は十分な水の供給が受けられず、満水面積 6ha の平木池が満水になることは極めて稀な状況で、水足地区は疏水組合からの脱退を余儀なくされました。



写真-5 明治 24（1891）年に造られた練部屋分水所
（東播磨水土地改良区パンフレットから引用）

せっかく開いた 20 町歩の新田も稲作不能となり、新田の大部分は長い間畑作に転用されていましたが、昭和 28（1953）年頃下代からポンプで揚水し長距離を送水することで稲作が復活するに至っています。

なお、疏水路は幹線、支線共に側面 1:1 勾配の素掘りではありますが、必要に応じて底面および両側に厚さ 6 寸（≒18cm）の粘土が漏水防止対策として施工されていたようです。

一方、昭和 24（1949）年頃から放置されたままだった平木池は、所有者の疏水組合が昭和 40（1965）年 12 月に、稲美土地（株）の斡旋で阪神土地（株）に売却、水足は地元の権利として組合に要請して代金の半額の割譲を受け、そのうちの約 6 割を土地改良区に納めています。

平木池は、昭和 41（1966）年には埋め立てられて宅地になり、今は多くの住宅が建ち並んでいます。

平木池に水を運んだ平木橋は、写真-2 のように雑木林の中に埋もれ、やがて人々から忘れ去られてしまいます。

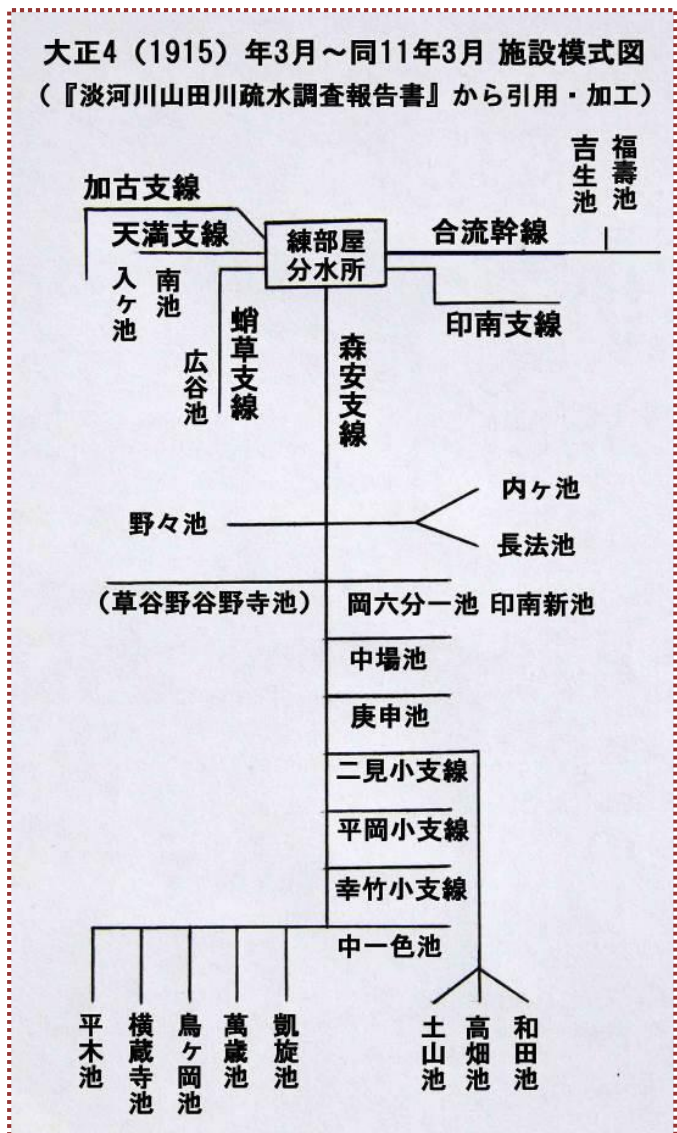


図-3 森安支線の水利系統図

■ 平木橋を設計したのは誰？

平木橋の設計者については、淡山疏水・東播用水博物館（以下「博物館」という）に設計者名を記した設計図等の資料はないようですが、勤務した技術者の一覧等を記した『山田川疏水沿革誌』や『退職吏員履歴書』が残されています。

神戸大学の神吉和夫氏は、平木橋が森安支線にあり、「森安支線は大正 2（1913）年 6 月測量に着手し同年 10 月終了、翌大正 3（1914）年 3 月これまた設計調書完結せり」と『山田川疏水沿革誌』に記されていることから、この間に山田川疏水事務所に在籍した 6 名の技術者を割り出し、柳本通義事務所長の下、この 6 名が平木橋の設計に関わった可能性があるとしています。

さらにそれぞれの教育環境や平木橋の意匠との関連などを考慮すると、平木橋の設計は 6 名が協力して、あるいは何人かが設計したという可能性が考えられるが、敢えて一人に絞るなら根津捨三ではないかと推測されています。



写真-6 伐開後の高掘り溝に架かる平木橋
（『加古川探訪』HP から引用）

■ モノローグ

『淡河川・山田川疏水記録誌』や『淡河川山田川疏水調査報告書』を読むと、この壮大な計画に関わった多くの方の名前が出てきますが、個々の施設の設計に関わった人の名が残念ながら出ていません。もちろん、計画あつての個々の施設の設計であり、計画を推し進めた人々の苦労は計り知れないものがあります。

ただ、優れた施設であるからこそ、後の世の人たちが残したいと思うものもあります。平木橋もそのひとつで、設計者は根津捨三ではないかと言われているのですが、この点について次号でもう少し調べてみようと思います。

【参考資料】

- 1 『兵庫県の近代化遺産』 兵庫県教育委員会 平成 18 年 3 月
- 2 『淡河川・山田川疏水記録誌』 いなみ野ため池ミュージアム運営協議会ほか 平成 22 年 3 月
- 3 『淡河川山田川疏水調査報告書』 兵庫県歴史文化遺産活用活性化実行委員会・淡山疎水検討会 平成 24 年 3 月
- 4 『月刊建設 Vol.54～近代土木遺産「平木橋」の移設保存について』 八木正樹 全国建設技術協会 平成 22 年 9 月・11 月
- 5 『水足史誌』 水足史誌編纂委員会 平成 2 年 10 月
- 6 『土木学会第 60 回年次学術講演会～平木（水路）橋の設計者』 神戸大学・神吉和夫 平成 17 年 9 月
- 7 『神野町をゆく (35) ～青之井用水』 飯沼博一「ひろかずのブログ」 令和 4 年 3 月
<https://blog.goo.ne.jp/hirokazu0630b/e/cece06d90d3dd5b0f616f2a5b7bbbe5c>
- 8 『第 8 回印南野まほろば紀行～平木橋』 「加古川探訪」HP
<http://gokurakuya.co.jp/kakogawa/ka8/04.html>
- 9 『レンガのある風景 (82) ～水路橋 (加古川市東部)』 「はりまレンガのある風景」HP 平成 28 年 1 月
https://hariman28.blogspot.com/2016/01/blog-post_29.html
- 10 『山田川疏水事業沿革誌』 兵庫県淡河川山田川普通水利組合 大正 4 年 7 月
- 11 『マリーゴールド』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

マリーゴールド

キク科コウオウソウ属（マンジュギク属）のうち草花として栽培される植物の総称。聖母マリアの祭日に咲いていたため「マリア様の黄金の花」とも呼ばれている。一年草が多いが一部多年草や亜灌木もある。全草に特有の臭気があるものが多い。4～10 月にかけて、茎に継続的に新たな蕾が発生し、直径 2～5cm ぐらいの鮮やかな黄・橙・暗赤色などの美しい花が咲く。水足西交差点付近にある某企業のマリーゴールド園に咲いていた。



写真-7 マリーゴールド

※発行：令和 6 (2024) 年 2 月 『ひょうご水百景』 No.190

改訂：令和 8 (2026) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.190